
自死への誘い

平維茂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

自死への誘い

【Nコード】

N2454F

【作者名】

平維茂

【あらすじ】

派遣社員、杉本義男は生きる事に疲れ果て、死にたいと思っていたが、恐怖心もあり、なかなか実行出来ないでいた。しかし、昨年の暮れ大新聞の夕刊のコラムを見て心が決まった。それは、京都の著名な仏教学者の自殺に関しての論説であった。『仏教は自殺を禁じていない。自殺は【悪】ではない、勇気有る決断である』勇気ある決断さえすれば楽になれるのだと杉本は思った。著名な仏教学者が言うのであるから確かである。杉本は直ぐに自殺する仲間を集め実効に移した。

一、

寒さに肩を竦めながら朝の中杉通りを杉本義男はＪＲ阿佐ヶ谷駅に向かつて歩い

ていた。歩道の両端の処々に二日前に降った雪が少しではあるがまだ積まれて残っ

ている。今日は一月三十一日、いよいよ計画を実行する日であった。昨年の暮れか

ら皆と何度も話し合い最終的に決めた事である。集合場所はＪＲ立川駅、午前九時。

予定では杉本を含め五人が集まる筈である。今日、参加しない者も居るかも知れな

い。それはそれで仕方がない。今回の事は誰にも強制は出来ない。強制する権利も

ない。ただ、希望する者達だけが集まり実行するのみである。

杉本は仕事の事でここ数年、深刻に悩んでいた。専門はコンピュータプログラ

マーである。会社組織に縛られる事を嫌い、最初から派遣社員の道を選んだ。しか

し、現実には自分の考えた事とは全く違っていた。派遣社員は派遣先で正社員にこき

使われ、少しでも反抗すると直ぐに別の派遣先に変えられてしまう。更に、毎日が

残業の繰り返しで、自宅に帰るのはいつも夜中近くになる。僅かな睡眠を取り再び

出社する。休日も返上で体力的にも精神的も極限状態にきていた。同じ派遣社員仲

間も耐え切れず退職する者や鬱病で休職する者も大勢いる。鬱病で

休職した者の中
には自殺した者もいる。睡眠不足と肉体疲労が重なり集中力が低下し、無気力となり、それが原因で仕事上のミスも増え、逆に仕事量が増える悪循環に陥ってしまっている。仕事中に睡魔に襲われる事もしばしばであった。このまま永久に眠れたら何と幸せかと思う事も有る。出勤、帰宅時の電車でも何度降りる駅を乗過ごした事か。派遣会社には給与をピン撥ねされ、待遇改善を頼んでも一向に聞き入れて貰えず、それかと言って、今の自分には転職の当てもない。ましてや貯えなどは無いに等しい。何を目的に働いているのか。これが人生なのか。このままで俺はどうなるのか。杉本は肉体的にも精神的にも追い込まれていたが、自分は他の同僚と違い絶対に鬱病にはならないと自信が有った。しかし、いつの日から自らも自死を考えるようになった。

ギリシャの哲学者プラトンは「肉体は魂の牢獄」と云っている。牢獄から抜け出せば楽になれる。楽になりた。何時間も、何日も、何年も眠り続けたい。死ねば必ず楽になれる。楽になれるなら早いに越した事はない。そう思えるようになった。

二、

出勤途中、駅のホームで線路を見ると、このまま飛び込んで電車に跳ねられ

れば楽になるのではと思った事も何度か有った。しかし、結果を想像すると怖くて

出来なかった。即死出来れば良いが、体が切断され痛みで苦しみなから死にたくは

なかった。腕や足が切断されても死ねないかも知れない。体に障害を背負って生き

て行かなければなくなるかも知れない。それは絶対にいやだ。杉本は自殺の方

法についても調べた。痛みも無く、苦しまず、楽に死ねる方法はな

いか。いつの間にか夢遊病者の様にインターネットで検索を始めていた。服毒、リストカット、首

吊り、入水、飛び込み、焼身、練炭自殺、その他諸々の方法が親切に掲載されてい

る。今の時代、自殺願望を持った人間が多く居るのに驚かされた。それだけ人間に

とって、今は住み辛い世の中に成っているのだと感じた。苦しんでいる人々が多

すぎる。生活が苦しい。生きるのが辛い。生きる目的が無い。将来の希望が無い。人

間は何の為に生きているのか。ただただ、自殺願望を掲示板に書き込む事で今の気

持を誰かに聞いてもらいたい、分かってもらいたい、そうする事で気持が些かでも

楽になるのであろうか。ネット上にはそのような書き込みが無数に

ある。中には死にたくても、いざとなると恐怖の余り死ねない人々も多くいる。決断が出来ないのである。死への恐怖と生きる苦しみのジレンマに陥り、掲示板に自分の気持を書き込む事で気を紛らわせていると思われる者達も多くいるようである。誰かに読んでもらえれば、それで気が休まるのである。自殺を思い止まるようにとのレスが有れば、それで安心する。しかし、それに対して、「誰も自分の立場を分かってくれない。自殺してやる」とまた反論のレスを書き込む。その繰り返しである。実際に追いつまれている者には何らの解決にはならない。しかし、自殺サイトの書き込みを見ている内に不思議と自分も死ねるのではと思えるようになってくる。死後の世界がどうか、死ねばどうなるかなどは考えない。とにかく楽になりたい一心である。しかし実行には至らなかった。なぜなら杉本にも死に対する恐怖感と自殺に対する罪悪感も些かではあるが残っていた。そして残念な事には全てのサイトに自殺を実行して成功した者達の書き込みが無い事である。それが杉本に自殺を思い止まらせていた。しかし、昨年の暮れ杉本は新聞の記事を見て心が決まった。それは、京都の著名な仏教学者の自殺に関しての論説である。

『仏教は自殺を禁じていない。自殺は【悪】ではない、勇気有る決

断である』

勇気ある決断さえすれば楽になれるのだと杉本は思った。著名な仏教学者が言うのであるから間違いない。仏様は自殺を勇気ある決断として許しておられる。勇気を持つて自殺さえすれば成仏出来る。あの世に行ける。そして、この世で肉体を持つた故の苦しみから開放され楽になれる。杉本は確信した。あとは実行する勇気だけであつた。杉本はその仏教学者に心の中で感謝した。

それからと言うもの、杉本は誰にも迷惑を掛けずに、痛みも無く、苦しむ事も無く、楽に死ねる方法がないかと必死で探し続けた。首吊りも意外と苦しみがないようにも言われているが、自ら首を吊った後の状態を想像するとためらわれた。睡眠薬と酒を飲み、密室で練炭自殺をするのが一番楽に死ねるではと考えた。熟睡している間に苦しむ事も体の損傷もなく横になったままの姿で安らかに死に至る事が出来る筈である。しかし、自宅で死ねば家主に迷惑を掛ける。車かと思つた。しかし、杉本は車を持っていなかった。レンタカーを使えばレンタカー会社に迷惑が掛かり、果ては親にまで迷惑が及ぶ。自ら命を絶つ事に於いて、出来る事なら誰にも迷惑を掛ける事はしなくなかった。しかし皆無とは言えない。魂が抜けた肉体は処理して

もらわなければならない。発見された後、場合によっては検死もされるだろう。事

後の処理に於いては申し訳ないが些かの迷惑が掛かるのは仕方がないかと思った。

三、

心が決まると杉本はインターネットの自殺サイトの掲示板の書き込みを以前より真剣に見て回った。自殺をしたいが実行できないと悩む者、自殺を予告する者、自殺の方法について書き込んでいる者。自殺する仲間を募集している者。なかには自殺する意思がなく面白半分の冷やかしもいた。自殺を真剣に考える者に対して許せない行為である。自殺防止の為にサイトも沢山有った。これから本気で死のうと考えている者の気持や環境が一切分かっていない。道徳論、宗教論は何の役にも立たない。道徳や宗教で今の生活は楽にはならない。ましてや神、仏に祈ったところで今の苦しい生活から解き放ってくれる訳が無い。

人間はいつか必ず死ぬ。フランスの哲学者パスカルが言うように人間は生まれながらに死刑を宣告されている。生まれた時から死刑囚である。そうであるなら、いつ死ぬかは自分で決める。この命は誰の物でもない、俺自身のものである。他人にとかく言われる筋合いはない。全く迷惑な話であり、杉本は怒りを感じた。杉本は掲示板の中で真剣に自殺仲間を求めていそうな者を見付けチャットやメールで何度も話し合った。そして、その内の四人と最終的に会う事に決めた。

彼らと会って本
気かどうか確かめ合い、本気なら決行日を決める事にする。

掲示板でのハンドルネームはMT、二十五歳、女性、車有り、職業は大手商社勤務。
不倫の末に相手の男に裏切られたのが自殺の理由であった。杉本はこの相手なら車
が使えると思った。

「私、会社の上司と三年間不倫していたの。別の部のチームリーダーで妻子持ち。
これからも付き合って行ければ結婚しなくても良いと思っていた。
とても好きだったわ。今、持っている車もその彼が買ってくれたの。私も誠心誠意、
彼に尽くした積もりでいたの。でも結局は裏切られた。もう死ぬんだもの全て話すわ。奥さんの
事は別に気にはしていないわ。最初から妻子持ちと分かっていたし。私、彼をとて
も愛していた。そして、信じていたわ。でも不倫の相手は私だけじゃなかったのよ。
他にも付き合っている相手が居たの。それも私と同期の親友の子だったのよ。そし
て、彼、その子には将来結婚の約束をしていたの。とてもショックだった。彼女、
最初から彼を私と奥さんから奪い取る積りでいたのよ。それ以来、私、神経がおか
しくなってしまうて。仕事も上の空でミスも多くなるしで、夜も寝られなくなつた
わ。それでつい毎晩お酒や睡眠薬を沢山飲むようになってしまった

の。今はアル中
とオーバードラッグよ。酔った勢いで彼が付き合っている同期の子
を殺そうかとも
思っただけを会社に持って行った事も有ったわ。でも結局、それ
は出来なかった。
毎日が辛くてどうする事も出来ないの。何もかもに疲れたの。私、
これから生きて
いても意味が無いわ。毎日、毎日死ぬ事ばかり考えているの。それ
で同じ死ぬなら
彼に仕返しをする事に決めたの。死ぬ前に全てを会社と奥さんにぶ
ちまけて、彼を
恨みながら彼がくれた車の中で死ぬ事にしたの。車の名義は彼の名
義のままだし。
今迄の彼との全ての経緯は手紙に書いて会社の役員全員と彼の奥さ
んに送るの。そ
れで何の未練も無いわ。生まれ変わってやり直したいの。痛みの無い
楽な死に方？練
炭が一番じゃないかと思うよ。車？私の使っても良いわよ。一人で
死ぬのは何とな
く寂しいような気がするの。知らない世界へ一人旅はしたくないし
ね。連れが居れ
ば少しは安心出来る気がするの。四、五人のグループなら寂しくも
ないし、楽しい
と思うよ。あの世でも困った時はお互い助け合えるんじゃない。結
構良いかもね」

杉本は話を聞いていて女の執念は恐ろしいと思った。そして、はた
して人間死んだ
ら生まれ変われるのか疑問にも思った。杉本自身は二度とこの世に
生まれ変わった

くない、こんな辛い世の中は二度と御免だと思っていた。気位の高い生意気そうな
女だと思ったが、彼女の車が使えるので何ら反論はしなかった。

四、

そして、K T、二十歳の男子大学生。

「死にたい理由？分かんないだ。でも、なんとなく死にたいんだ。大学に入ってから死ぬ事ばかり考えているよ。親の言うように、幾つもの塾に通い、必死に受験勉強して親が希望する大学に入ったんだけど、それから毎日が何だか空しくて全然楽しくないんだ。講義にも出席しなくなって無気力状態でさ。毎日アルバイトでゴロゴロしているよ。卒業して会社にも勤めたくない。それで、楽に死ぬ方法が有ればと思い探していたんだ。でも一人で死ぬのが何だか怖くてさ。仲間が居れば死ぬ事が出来るのではとも思ってたんだ」

杉本は何だか彼の気持ちが分かるような気がした。将来、学校を卒業し社会に出て会社に振り回され、抑圧され、使い捨てにされ、結局は今の俺の様に身も心もボロボロにされてしまうのだと同情した。社会に出てから追い詰められた状態で死ぬよりは、今死にたいと願っているのなら、それが彼にとっては良い選択ではと思った。自殺は罪ではないのだから。

N M、二十一歳の女性フリーター。

日雇い派遣の仕事でアパートの家賃も払えず、追い出されネットカフェを泊まり歩く生活にとことん疲れ果てたと言っていた。ここ数年の規制緩和で働く者の立場が弱くなってしまった。派遣会社の乱立で企業は目先の利益に囚われ社員を大事にしなくなり派遣で間に合わせようとする。社員を養成する事を怠り、労働者は使い捨ての世の中になっている。働く側も派遣の立場では派遣先の会社を信用しないし、忠誠心も湧いてこない。派遣先の会社も人を安く使おうとする。派遣社員の態度が悪いと判断すれば直ぐに派遣会社にクレームをし、派遣社員を入れ替えさせる。派遣先企業の労働組合は派遣社員には冷たい。派遣社員に対する違法労働行為も見て見ぬ振りである。正社員がやりたがらない仕事を押し付けられ、派遣社員には危険な作業も平気で押し付けてくる。労働組合も会社に抗議などする事もない。逆に派遣社員は労働組合や支持母体などから邪魔者扱いにされる。派遣社員が職場で怪我をすれば労災申請をさせず組織全体で隠そうとする。派遣社員は企業内には定着しない、渡り鳥である。社内の情報が直ぐに外部に漏れる。熟練社員も居なくなる。このような状態が続けば企業の信用も無くなり、企業としての体力も落ちてくる。

企業の命は有能な社員であり、その社員の育成である。更に正社員

と派遣社員の収

入の格差の広がりは著しい傾向に有る。所得格差が広がり、外国なら既に革命が起

きてても不思議でない状態であるが、日本人は内に閉じ籠もり最後には自らの命を絶

つ道を選んでしまう。人が大切にされない時代になってしまった。これからも、こ

の様な社会が続く限り近い将来日本の経済力も低下し、国際社会での競争力や信用

も失われ、自殺者も更に増加するのは確実である、と杉本は思った。

最後にH W、十六歳の男子高校生。

原因は学校でのいじめであった。クラスの他の生徒の前で辱められる。校庭の隅に

呼び出され暴力をふるわれる。金をせびられる。金を持って来なければ再び暴力を

ふるわれる。毎日学校に行くのが怖い。友達に会いたくない。親にも言えない。学

校も教師も頼りにならない。何にもしてくれない。誰も自分を守ってくれない。全

てが塞がれてしまっている。学校の屋上から飛び降りていじめた相手に思い知らせ

ようかと考え自殺を試みたが怖くて出来なかったと言っていた。でも、死にたい、

楽に死ねる方法があれば直ぐにでも死にたい、と言っていた。

今の時代、大人は子供を叱れない、子供を守れない。犯罪の低年齢化も進んでいる。

子供が親を殺す、親が子供を殺す事が平気に行はれる。教師の犯罪

も増えている。

学校、教師、家庭全てが狂っている。今の様な社会が続く限り、子供の自殺もこれから確実に増えて行く。成長し社会に出て毒され他人を傷付けるよりは、それ以前に清いままで自ら命を絶つのも良いか、と杉本は思った。

五、

一月の第二日曜、午後二時にＪＲ吉祥寺駅の改札付近で皆と待合わせをし、駅前

ビルの二階の喫茶店に入った。お互いの気持を確認し合うのである。杉本を含め、

皆が皆、青白い顔色で強張った表情をしていた。果たしてここに集まっている者は

皆が本気で自殺する気持が有るのか、まだ疑いを持っていた。他の席の客に話の内

容を聞かれないように出来るだけ小声で話した。

先ず、杉本から始めた。

「俺、ＹＳの杉本義男」

続いてハンドルネームＭＴが自己紹介した。

「私はＭＴの武田美代子」

実名かどうかは定かでないが一応名乗った。杉本には彼女は気が強そうで自殺する

タイプには見えなかったが、目の焦点が定まらない虚ろな表情をしていた。薬の飲

みすぎではと感じた。

そして、ＫＴ、二十歳の男子大学生。

「俺、ＫＴの寺池健作」

度の強い眼鏡を掛け、神経質そうな顔をしていた。

NM、二十一歳の女性フリーター

「私はNMの三澤直子」

薄汚れたジーパンを穿き化粧もせず、伏し目で、いかにも生活に疲れ果てた表情を

している。神経質そうに携帯電話の着信を絶えず気にしてる。この期に及んでも派

遣会社からの連絡を待っているのか。派遣会社からの連絡を待つのが習慣として骨

髄まで染み付いている。着信があれば一日生き延びる事が出来、無ければ途方に

暮れる。その繰り返しである。その日暮しで将来の当ても無く日々脅える生活を

余儀なくされている。同年代の多くの女性達は化粧をして飾り立て楽しい生活を送

っている。しかし、今の彼女は住む処にも困り、食べるにも事欠き、化粧品を買う

余裕などない。化粧をし、それなりの服装をすれば、魅力有る女性に成っているの

ではとも思ったが、今の彼女は精神的にも肉体的にも疲弊し切っている。杉本は目

の前に居る彼女に女としての美しさや魅力は微塵も感じなかった。

HW、十六歳の男子高校生

「僕はHWの渡辺博光」

大人しく引つ込み思案の性格のようであった。椅子に座っていても、後ろを何度か

振り返ってみたりして、少しの音にも敏感に反応し、常に周りを気にして何かに脅

えている表情をしている。誰が彼をここまで追い込んでしまったのか。今の世の中、

全てに責任が有る。学校、教師、いじめる側の生徒、その生徒を育てた親、いじめ

を見て見ない振りをしている回りの人間……。このような社会が続く限り、これか

らも犠牲となる少年は後を絶たない、と杉本は思った。

六、

「今日、集まったのはお互いの気持を確認する事と実行日を決める為なんだけど」

杉本が皆の顔を見ながら小声で話した。

「そんな事、分かってるわよ。ところで貴方は大丈夫なの」

武田美代子がぶっきらぼうに杉本に訊いた。

「俺は勿論大丈夫だよ。君の車を使えるんだったら」

「車はOKよ。ワンボックスカーだから五人が乗っても余裕が有るわよ」

傲慢するかのようにであった。

「それなら良いよ。君の車が使えないと皆が困る事になるから。それで他の皆は」

そう言つて、杉本は他の三人の顔を見た。

「俺も良いよ。ずっと以前から気持ちは決まってるよ」

寺池健作が言つと、

「私も良いわ。出来れば早く」

三澤直子は焦っているようであった。

「俺も」

最後の渡辺博光の声は小さかった。

「皆、本当に良いのか。後悔しないのか？」

杉本が念を押して訊くと、皆が首を縦に振った。ここに来ている皆は悩みに悩み決めた事ではあると思ったが、その反面死ぬと言う事がこんなに簡単に決められるものかと思えた。杉本は余りにも簡単過ぎて彼らが本気でいるのか、まだ半信半疑でいた。果たして決行日に皆が来るのか心配にもなった。特に武田美代子の気が変わり来なくなると全てが狂ってしまう。

「じゃあ、これで決まりだね」

杉本が確認するかのように皆の顔を見た。

「日にちはいつにするの。そして場所は。私、早い方が良いんだけど」

武田美代子は苛立っていた。

「私も早い方が良いは。もう生活費が底をついてしまっているし、これ以上今の生活に耐えられない。毎日、毎日携帯で仕事の連絡を待ってさあ、今

日は仕事に有り
付けるか、明日は仕事に有り付けるか、そんな心配ばかり。嫌な仕事でも生活の為に受けなければならないし。仕事が無い日が続くとカップラーメン一杯で一日を過ぎなければならない事も有るわ。泊まる金が無くて、野宿した事も何度も有るの。
派遣先や派遣会社も私達の足元を見てくるので、もう働きたくもない。労働基準法なんて別の国の話よね。もう何もかもに疲れたの。早く楽になりたいわ」

三澤直子は今にも泣きそうな顔をしていた。

働く者の立場が保護されていない。使い捨てである。杉本は今の派遣会社は国家公認の手配師だと思った。自殺者が増加するのは働く者の利益を蝕み、人権を蔑ろにする派遣会社と派遣社員を受け入れる企業、それらの制度を許した国に有る。杉本は三澤直子を見ながら自分も同じ状況であると思った。

「それじゃあ、一月三十一日は如何かな」

寺池健作が遠慮がちに小さな声で言うと、

「まだ、二週間以上有るじゃないの」

武田美代子が怒ったように大きな声で言ったので、店内にいる客が一斉に彼らに注目した。

「じめん」

そう言つて、武田美代子が首を竦めた。

「困つたわ。実行すると決めたんだったら、私も早い方が良いの」

三澤直子は困り果てた顔をした。

「俺も彼の言うように一月三十一日で良いと思うんだ。理由は……
。飛ぶ鳥跡を

濁さずでさ、身辺整理の時間が必要なんだ。死んだ後に出来るだけ
身内や親戚、友

人に迷惑を掛けないようにしておきたいんだ。それと、もう一つは
気持の整理の時

間だよ。今は死ぬと決めていても途中で気持が変る者が出てくるか
も知れないだろ。

『死ななければ良かった』なんて言われると困るしな。あの世に行
つてから後悔さ
せたくないからな」

杉本が落着いた様子で話した。杉本は死を前にして自分の気持ち
が据わっている事に
吾ながら驚いた。

「俺、気持は決まっているんだけどさ、やはり身の回りの物の処分
も有るし……」

寺池健作が皆に申し訳なさそうにしていた。

「僕、もう決めたんだから。二週間位だったら我慢するよ。その間に遺書を書いたり、友人に手紙を書いたりするよ。皆と一緒に楽に死ねるんだもの気持は絶対変らないよ」

渡辺博光は自分を納得させるかの様であった。

「仕方ないはね」

武田美代子が渋々妥協した。

「私、これから二週間の間、どうすれば良いのよ。お金も無いし、行く所も無いのよ。早く楽になりたいのよ」

三澤直子はハンカチで涙を拭きながら、皆に懇願するかのようであった。

「それじゃあ、あなた。それまで私の所に来れば・・・」

武田美代子は投遣りの様な口ぶりであった。

「本当？本当に良いの？」

「良いわよ！これも何かの縁よ」

「有難う。助かるは」

三澤直子が嬉しそうな表情をした。

「それで、場所は何処にする？」

武田美代子が訊いた。

「東京と山梨の県境の山の中であつかな。青梅街道から途中適当な山道を選んで奥に入つて行けば」

杉本が提案した。

「じゃあ、それで決まりだね」

武田美代子が言うつと、他の三人が同時に頷いた。そして武田美代子が更に付け加えた。

「睡眠薬とお酒は私が用意するわね。沢山買つてあつたので余つてゐる。あの世には持つて行けないしね」

「七輪と練炭はどうする」

寺池健作が訊いた。

「七輪と練炭は、当日、途中のホームセンターで調達するよ」

杉本がそう言つて、皆の顔を見た。

「それじゃあ、私の住んでいる所、立川だから、当日は立川駅に午前九時でどう」

武田美代子は皆でドライブにでも行くかの様に楽しそうであった。皆から反論は出なかった。しかし、杉本は彼女の楽しそうな表情を見て、彼女が本当に自殺を考え
ているのか不思議に思えた。それとも自殺する事で相手の男を貶める事が出来るので、それが楽しいのかとも思えた。しかし、これで取り敢えず決行の日は決まった。

七、

決行の当日、杉本が阿佐ヶ谷駅に着いたのは午前八時に少し前であつた。都心に向かう中央線の電車は相変わらずラッシュですし詰め状態であつた。反対方向の高尾行きの快速はガラガラで座る事もできた。杉本はこれからはあの様な過酷な状態で通勤しなくて済むのだと思うと両肩が急に軽くなったように感じた。

「何故に人間は毎日、毎日あの様にまでして通勤し、会社では消耗品の様に扱われ、身も心もすり減らさなければならぬのかだろう。人間、何の為にこの世に生きるのか、何の為に人生なのか。人間本来の生きる姿ではない、何処か世の中間違っている。今、あのラッシュの電車の中で身動きも出来ない状態にいる彼らの中にも早く死んで楽になりたいと願っている連中も沢山居るに違いない。彼らも今の俺たちと同様に早く『勇気有る決断』をすれば楽になれるのに」と、同情の念さえ覚えた。車窓からは雲一つ無い、晴れ渡った真冬の空と関東平野が一望できた。電車が荻窪駅を過ぎ、吉祥寺、三鷹と行くに従い、左手の遙か向うには雪化粧をした真っ白な富士山が見えた。とても綺麗だと思った。杉本は今までの人生で味わった事が

ない、落ち着いた、そして清々しい気持ちになった。立川駅に近くなるにつれて過酷な生活から開放され楽になれると確信した。今日のある瞬間からは悩む事もなくなり、苦しむ事もなくなる。この世に生きる煩わしさから開放されると思うと楽しくさえなってきた。そして、先日の武田美代子の楽しそうにしていた表情をふと思い出した。でもこの楽しさは彼女とは次元が全く違うとも思った。

八、

立川駅の改札付近には三澤直子が先に来て待っていた。武田美代子が駅の南側に車を止めて待っているとの事であった。九時少し過ぎて寺池健作も到着した。しかし、三十分過ぎても渡辺博光だけが姿を現さなかった。耐え切れずに何処かで既に実行してしまったのか。或いは気が変わり思い止まったのか。もし、思い止まったのであれば俺たちの事が漏れて誰かが止めに来るのではと急に不安になった。そう
で有れば急がなければならない。三人は周りを気にしながら武田美代子の車に乗り込み先を急いだ。国道十六号線に出て近くのホームセンターで七輪と練炭を買い揃えた。これで準備は万端であった。車は福生市内に入り、右側にだっ広い横田基地が見えてきた。横田基地を通り過ぎ、箱根ヶ崎西の交差点を左に曲がり青梅街道に出て車は西へ向かった。

先日、最初に会った時より皆の顔は穏やかな明るい表情になっていた。今日のある瞬間からこの世の煩わしさから開放されると確信しているのか、安堵感に包まれて
いるようにも見えた。皆が、楽になれると信じているようであった。

「あの高校生どうしたのかな」

後部座席に座っている寺池健作がポツリと言っと、

「怖くなったのよ」

車を運転している武田美代子が当然であるかの様に言った。

「来れば良かったのにな」

寺池健作は仲間が減ったので残念そうにしていた。

「彼が自分で判断し自分で決める事だから、来なければ来ないで仕方がないよ」

杉本が皆に聞こえるように言うと、

「それで良いのかな」

寺池健作は寂しそうな表情をした。

「でも、彼、今日まで待てなくて既に何処かで実行したかも知れないわよ」

三澤直子が自分の境遇と照らせ合わせた。

「そうかもね。きっとそうよ」

武田美代子は一人で納得していた。

「でも、一人で逝くなんて寂しいよな」

寺池健作はやはり仲間が減った事への寂しさを感じていた。

「それはそれで仕方がないよ。彼の人生なんだから。他人がとやかく言えないよ」

杉本の気持ちであつた。

「私さあ、昨日、会社の役員全員と彼の奥さんに手紙出したの。それも書留の速達で。全てぶちまけたは。今日着く筈よ。この車もまだあの人の名義だしね。大変な事になると思うよ。私、魂になったら見届けに行くの。楽しみだよ」

武田美代子は楽しそうにしていた。

「魂か・・・」

杉本は心の中でふと思った。はたして魂が有るのか、魂になってこの世の苦痛から開放されるのか。どうであれ、今の生活から開放されるのは確かであると思った。

車は既に奥多摩溪谷沿いの御岳駅近くまで来ていた。

「ねえ、最後の晚餐じゃないけど、最後の昼食をしない」

武田美代子が楽しそうに提案した。

「それも良いね。でも私、もうお金ないよ」

三澤直子がうつむいてしまった。

「心配要らないは。私が皆に奢るわよ」

武田美代子がそう言うと、三澤直子は安心して笑顔になった。

九、

平日で道路も空いていて観光客やハイカーの姿も無くゆったりとした長閑な風景であった。

四人は道路沿いの食堂に入り最後の食事をする事にした。平日とあつて食堂も開店休業の状態では客は杉本ら四人だけであつた。下の溪谷を流れる水音が良く聞こえた。

杉本は以前に数回、休日にこの溪谷に来た事が有つたが、平日に来たのは初めてであつた。

人が少なく、まるで以前に来た時とは全く違つた別の世界のように感じられた。このような

な処でノンビリとした生活を毎日送る事が出来れば死ぬ必要は無いのにも思えた。

「私が全部奢るから好きなもの頼んで。今日は豪華にいきましょうよ」

武田美代子が気前良く言つたので、各々好きな物を注文し、杉本と寺池健作はビールも注文した。

「いよいよだね」

三澤直子が楽しそうな表情をした。

杉本は三澤直子の様子を見て、今迄の彼女の生活がいかに過酷であつたか垣間見る事

が出来た。

「そうね。あと少しね。皆、あの世に行っても宜しくね」

武田美代子は嬉しそうであった。

「これも何かの縁ね」

三澤直子は開放感に満ち溢れた表情をした。

「やはり・・・、一人でなくて良かったと思うよ。一人だと寂しいもな。皆、宜しく」

寺池健作も安心していた。

「私、今まで貯めたお金、全部両親に送ったの。それに会社勤め始めた時に生命保険に入っていたの。受取人は両親にしてあるわ。掛けてから五年になるから自殺でも保険金が出る筈よ。先立つ娘としてのせめてもの償い。最後の親孝行ね」

武田美代子があっけらかんとした表情で言った。娘の保険金がり、大金を手にしたとしても親は悲しみこそすれ決して喜ぶ事はない筈である。杉本自身は両親には申し訳ない気持でいた。

「武田さんは何から何まで周到で偉いわね。私なんかとても真似できないは」

三澤直子は感心していた。

「そんな事ないわよ。結局は親不孝なんだよね」

武田美代子が自分を納得させるかのように、今迄とは違い少ししみりとした表情をした。

「私なんか親に金銭的負担ばかり掛けて、親不孝ばかり。兄にも負担を掛けてきたわ。でも私が死ねば、これ以上家族に迷惑を掛ける事が無くなるから。それはそれでひと安心よ。そら、親は一時的には悲しむかもしれないけど、結果的には親兄弟への負担もなくなるしね。これで良いんだわ」

今までの不孝を詫びるかのように三澤直子が話した。

「人間、いつかは必ず死ぬんだから。早いか遅いかの違いだよな。俺なんかこの世に生まれて来たのが最初からそもそも間違いだっただよな。小さい時から親の言い成りに何軒もの塾に通わされ、親の願う学校に進学して。子供の気持なんてお構いなし。子供は親の欲望、見栄を満足させる道具みたいなものだよ。親が満足しさえすればそれで良いんだよ。何の為の人生か分からないよな。人生なつてつまんなし、社会になんか出たくないよ」

寺池健作が自分を振り返りながら、親への不満をぶちまけた。

「今の世の中、狂ってるんだよ。狂ってる世の中とは早くオサラバした方が良くよ。もうすぐだから。もうすぐすると皆と一緒に楽になれるよ」

杉本もこの世の苦しみからもう少しで解放されると思った。

「そうね。もうすぐね」

武田美代子も神妙な顔つきをした。

「あの世でまた皆と会えるかな」

三澤直子が訊いた。

「皆、一緒に死ぬんだからあの世でも一緒じゃないのか？」

寺池健作は当然の様に思っていた。

杉本は一人で死ぬか、皆と一緒に死ぬかはどうでも良かった。たまたま武田美代子が車を持っていたので仲間に加わっただけであり、皆の話を聞いていると返って煩わしくなる事もあった。杉本は今までの人生の疲れが溜まっていたのかビールを飲んだせいで急に酔いが回って来た。

「そろそろ行こうか」

杉本が皆を促せた。

「皆、これから先の事はもう決まってるんだから。まだ慌てる事はないわよ。もう少し、この世の名残を味わっていようよ」

武田美代子が皆に言うつと、

「そうね。それもそうよね」

これから先の生活に心配が無くなった三澤直子が賛成した。

「どんどん食べてよ。私が奢るんだから」

武田美代子が皆に勧め、更に言った。

「私も飲もうかな。飲みたい気分なんだけどな」

「俺達飲んでしまってるし、車は誰が運転するんだよ。酔って事故でもしたら、予定が狂うよな」

杉本が心配して言うつと、

「武田さん。飲んで良いわよ。私、飲まないし、代わりに運転するから」

三澤直子が言うつと、

「あんた、運転免許持ってんだ」

武田美代子が驚いた。

「ええ、持ってるわ。以前、何度も車で配達の仕事もした事も有るし」

「そうなんだ。大変だね」

武田美代子がそう言って、生ビールを頼み一気に飲み干した。そして、その後は焼酎をチビリチビリとやり始めた。

「やはりお酒は良いわね。でも今日で飲むのも最後。今まで随分と飲んだわ。全てはあの男のせいよ。あの男が私を裏切ったのよ。死んでからも絶対恨んでやるから。恨み続けてやるわ」

杉本は思った。武田美代子はその男に裏切られたかも知れないが、武田美代子もその男の奥さんを裏切っているのだと。勝手なものである。武田美代子は酒の所為で目が据わった状態になってきた。酒で顔が赤くなると言うより、青くなってきた。それにしても女の恨みは恐ろしいと思った。死んでから本当に化けて出るのではと思った。今の様子から判断してその可能性は大いに有り得る。

「あんた達も飲みなさいよ。男なんでしょ。飲めるのは今日だけなんだから」

少し声が大きくなってきたので杉本と他の二人が回りを気にした。

武田美代子は酔った勢

いで今迄溜まっていた不満を杉本と寺池健作に一気にぶつけ始めたので二人はタジタジになつてしまった。この調子で行けば、武田美代子に睡眠薬は必要なくなるのでは思つた。

「彼女、昨日まで毎晩飲み続けて凄かつたわよ」

三澤直子が小声で杉本と寺池健作に話した。

「それじゃあ君は毎日、彼女に付き合わされて大変だったんだ」

杉本が同情した。

「そうでもないわ。お陰で彼女のアパートで今日迄ノンビリ過ごせたから。彼女には感謝してるの」

「そろそろ、出た方が良くないでしょうか」

寺池健作が武田美代子の様子を見ながら心配していた。武田美代子は既に酩酊状態に近かつた。

「そうしよつか」

杉本が武田美代子を促し、千鳥足の武田美代子を皆で抱えながら車に乗り込んだ。

十、

四人は再び目的地を求めて走り始めた。武田美代子は後部座席でぐっすりと寝込んでしまっていた。

青梅街道を西に向かい適当な場所を探していたが結局見付ける事が出来ず、山梨の塩山まで来てしまった。塩山から国道一四〇号線を北に少し走ると山に入る細い道が左側に有ったのでそこに入る事にした。二、三十分ほど走ったであろつか、さらに細い林道を見つけた。林道には二日前に降った雪が少しではあるがまだ積もった状態で、タイヤの跡も足跡も無かった。その林道を山の中に進んで行くと脇に車を一台止める事が出来る場所を見付けた。

「ここで良いじゃないの」

そう言つて、三澤直子がその場所に車を止めた。杉本もさつき飲んだビールのせいで車の助手席で眠り込んでしまっていた。

「起きてよ」

三澤直子が杉本を揺り起こすと、杉本は咄嗟の事で何が起きたか分からず、眠い眼を擦りながら周囲を見回した。

「なに寝ぼけてんの」

三澤直子が少し怒ったように言うと、

「ああ、ごめん。すっかり寝てしまった」

杉本は素直に謝った。

「ここで良いでしょう」

三澤直子が再び杉本に訊いた。

「うん・・・」

杉本はここまでどの様にして来たのか分からず頼りなげに返事をした。

「それでは、始めましょうか」

寺池健作が促した。武田美代子は熟睡していて、起こしても起きる気配がなくそのまま寝かせておく事にした。三澤直子が睡眠薬の瓶を取り出し、中の錠剤をテッシユの上に広げた。

「飲みたい人は適当に飲んで。お酒は彼女が色々と用意してくれてあるから」

三澤直子が酒の詰まったクーラーボックスを開けた。クーラーボッ

クスの中には缶ビールや酎ハイ、ウイスキーまでも入っていた。杉本は車の外に出て七輪で練炭に火を熾し始めた。車の外は寒く凍えるようで、これから始まる儀式の事を思い緊張も手伝ってか手元が思うように動かなかった。慣れない手付きで火を熾すと、それでも暫くすると練炭の下が赤くなってきた。準備は全て整った。七輪は車の外に暫くの間置いたままにした。車の中に戻ると暖房が効いて暖かった。杉本はこの世での最後の温もりかと思った。それでも、眠り込んでいる武田美代子以外はさすがに緊張してきた。杉本は急に胃が収縮するような激しい痛みを覚え、吐き気を催し車外に飛び出した。寺池健作も気分が悪くなったようで杉本に続き車から出て来た。三澤直子は緊張はしているが、落ち着いた様子で運転席から二人を心配そうに見ていた。いざとなれば、女性の方が度胸が据わるようであった。

「大丈夫なの」

三澤直子が窓越しに声を掛けると、山道の脇にしゃがんでいる杉本と寺池健作が頭を縦に振った。二人は暫く冷たい風に当たり、気持ちを落着かせてから車内に戻った。杉本は自分の顔が引きつって来るのが分かった。体が小刻みに震えていた。寺池健作も同じであった。そして、皆無口になっていた。

「大丈夫ね。これで良いのよね」

三澤直子が自分を納得させるかの様に杉本と寺池健作に念を押した。

「そうだよな。これで皆が楽になれるんだ」

寺池健作も自分自身を納得させた。杉本は寺池健作の声が震えているように感じた。

杉本にも今迄感じた事がない恐怖感が急に襲ってきた。三澤直子が大量の睡眠薬の錠剤を口に含み、酎ハイで一気に飲み、そしてシートの背凭れに凭れ掛り眼を閉じて静かに待った。杉本と寺池健作はそれを見て震える手で缶ビールの蓋を開け、睡眠薬の錠剤とともに飲んだ。杉本は恐怖と緊張による胃の痛みで戻しそうになったが我慢した。暫くは緊張のせいか中々眠気を催してこなかった。それでも薬とアルコールの相乗作用により急に睡魔が襲ってきた。

「それじゃ、始めるよ」

杉本がそう言つて助手席のドアを開け七輪を車内に入れた。事の成り行きを知らずに既に眠っている武田美代子を除いた三人はシートに深く座りこの世の嫌な事から開放されると信じて眠りの世界に入るのを待った。

「ああ、これで毎日あくせく働く必要も無くなる。ゆっくりと眠れ

る。この世の疲れから開放される。もう直ぐ、もう直ぐで楽になれる」

杉本は心の中で自分にそう言い聞かせた。強烈な睡魔が襲いかかり、一瞬金縛りに会ったかのように体が動かなくなり、意識が朦朧とした。やがて深い永遠の眠りの世界に陥いるかのように思われた。こんなに気持ち良く眠れるのは何年ぶりであるうか。長年、体に蓄積されていた疲労感や苦痛が消え去って行くようであった。とても気持ちが良かった。

「これで良いんだ。やはりこれで良かった。やっと楽になれる」

杉本は眠りの中で思った。そしてその瞬間、幽かに夢を見たような気がした。

十一、

何時間経ったであろうか、杉本は頭の芯を締め付けられる激しい痛と呼吸困難で

眼を覚ました。そして自分が車の外で地面に這い蹲り苦しさでもがいているのに気が付いた。周りは既に日が暮れ真っ暗闇になっていた。

「いつの間に車から出たのだろうか。苦しさを余り無意識に飛び出したのだろうか。

頭が割れそうに痛い。息が苦しい。自分は死ねなかったのか。何でなんだ。他の三人は？」

苦しみの中で杉本はそう思った。ふと、周りを見ると暗闇の中で他の三人も地面に這い蹲り苦しみで必死にもがいているのが幽かに見えた。

「なんだ、奴らも死ねなかったのか」

杉本は余りの苦しさで彼らに声を掛ける事が出来なかった。それに強い吐き気と喉の渴きを覚え、それと共に今まで味わった事のない恐ろしい程の孤独感が体全体を襲ってきた。

「これは何なんだ。楽に死ねる筈だったのに」

杉本は失敗したと思った。そして、必死の思いで立ち上がり、四、五メートル先の

車に戻ろうとした。ふらふらになりながら一步一步車に近付いて行き、助手席の窓から中を覗き込んだ。その瞬間、啞然として立ち竦んでしまった。助手席には苦しみに喘ぐ顔をした自分が横たわっていた。運転席には三澤直子、後部座席には武田美代子と寺池健作の姿が有った。彼らも苦しみで顔が歪んでいた。

「これは、これは・・・、一体どうしたんだ」

杉本は情況が直ぐには飲み込めなかった。その間にも頭は割れるような激痛に襲われ、呼吸困難と吐き気がした。それと寒気と、えも言われぬ寂しさを感じ体全体に震えがきて、鎧でも着たかの様に重く感じた。杉本は車の中に入ろうとして扉のノブに手を掛けると手が扉を抜けて車の中まで入ってしまった。

「あ！。俺は、俺は・・・」

杉本は啞然とした。

「車の中に横たわっているのは・・・？」

後ろを見ると、他の三人が這いながら車に近付いて来るのが見えた。そして杉本には彼らの姿が近くなるに従い白く透き通って見えた。彼らも杉本と同様に苦しみで喘いでいた。

「助けて……。苦しい。我慢出来ない。早く、早く救急車を呼んで。こんなに苦しいんだったらもう死にたくなんかない」

それは武田美代子の声であった。

「苦しい、苦しい。お願い、助けて」

三澤直子が絞るような声で泣き叫んでいるのが聞こえた。寺池健作も苦しみで喘ぎながら何か叫んでいたが声にならなかった。杉本は苦しみと恐怖のあまりその場にしゃがみ込んでしまった。暫くして武田美代子がよろけながら杉本の傍に来て言った。

「お願い。車の中に携帯が有るわ。それで救急車を呼んで。早く、早くして」

髪を振り乱し顔は苦痛で歪み半狂乱の状態になっていた。情況が飲み込めず、杉本を見ても生きた人間にしか見えないようであった。

「俺たち、俺たち死んだんだよ」

杉本が絞るような声で武田美代子に言うと、

「そんな筈ないは。こんなに苦しいんだから。お願い。早く救急車を呼んで。我慢できないの。頭の芯が締め付けられるように痛くて、息も苦しいの。」

早くお願い。
お願いよ」

武田美代子は泣き叫びながら杉本に懇願した。杉本自身、苦しくて他人の事まで構っていられなかった。

「車の中をよく見るんだ」

今の杉本にはそれを言うのがやっとであった。武田美代子はよろけるようにして立ち上がり車の中を覗き込んだ。

「ギャー！」

武田美代子が叫んだ。

「私たち・・・」

武田美代子はそう言ったきり地面に倒れ込んでしまった。そして、何度も叫び続けた。

「どうしたの。何なの。何なのよ」

「頭が割れそうに痛い。息が出来ない。苦しい、助けて・・・」

「お願いだから助けて・・・」

「助けて、助けて、ねえ、助けて・・・」

「神様、助けて下さい」

「仏様、助けて下さい」

「神様、仏様……。お願い！」

何度も、何度も、何度も泣き叫び続けていた。寺池健作も三澤直子も杉本の傍に来て、車の中を覗いた。その後の事は武田美代子のそれと同じであった。彼らも苦痛のあまり叫び続けた。杉本も同じであった。

「何で、どうして」

「楽になれる筈じゃなかったのか」

「頭が痛い。息が出来ない。苦しい」

杉本も叫んでいた。そして、極度の孤独感と恐怖感に苛まれた。彼らにとって、昼も夜も薄暗い闇の世界となってしまうた。杉本は山の中だからかと思った。お互いの顔は青白く苦しみで喘ぎ、痩せこけた表情に変わった。生前とは似ても似つかない、見るも無残な姿となり、正しく亡者そのものになっていた。

十二、

一週間程経ったであろうか、通りすがりのハイカーが車を見つけ警察に通報した。

間もなく警察のパトカーや捜査の車が何台も来て現場検証が始まり、死体が検死の

為に病院に運ばれた。死体が運ばれると同時に何かの糸で引っ張られるかのように、

杉本と他の三人は自分達の意味とは全く関係なく死体に付いて行つた。そして検死

台で監察医が自分達の体を順番に切り刻む状況を見せられた。メスで喉、胸、腹を

切開され、更に内臓まで取り出され調べられた。女性の場合は子宮と膣まで開けら

れて調べられた。武田美代子の子宮には子供の握り拳程の小さな胎児がいた。武田

美代子はそれを見るなり気が狂ったように叫んだ。しかし、その叫びは生きている

人間には届かなかった。皆が皆、自分の体が解剖されるのを見て惨いと思った。顔

を背けたくても何かの強い力が働き顔を背ける事が出来ず、目も閉じる事が出来な

かった。最初から最後までこの光景を見続けさせられた。検死の結果、一酸化炭素

中毒による集団自殺と断定され、遺体は身元が判明した順に家族に引き渡された。

家族が遺体を引取ると同時に、本人達も遺体に引き寄せられて付いていった。それ

から、皆とは永遠に会う事はなかった。杉本は自分の亡骸の傍で頭

の痛みと呼吸の

苦しさに喘ぎ、孤独感と恐怖感に苛まれ続けた。これから一体全体どうなるのか不

安が増した。死んでも楽になれず、生きている時以上に苦しみが増幅した。肉体が

ら離れたにもかかわらず肉体の重さを感じ、より以上に肉体的苦痛も感じた。どう

すればこの苦しみから逃れる事が出来るのか。もはや生前の様に自殺と言う逃げ道

は無い。葬式が済めば楽になれるのか。僧侶が読経を上げ成仏させてくれるのか。

杉本は期待した。棺に入れられた自分の亡骸を苦痛と共に見続けた。両親や親

戚が集まり何か話しているようであつたが、生きている時と違って良く聞き取れな

かった。只、悲しんでいる事だけは分かった。通夜が済み告別式も終り亡骸は斎場

に運ばれた。斎場で台車に乗せられ釜の中に入れられ点火された。釜の扉の外に立

つていても、自分の亡骸が焼かれるのが良く見えた。火で焙られスルメの様に反り

返り、粉々になり、灰となつて行く。抜け殻と成つても、生きたまま焼かれている

ように熱さを感じた。

通夜や告別式の間、僧侶が経を上げていたが、それを聞いても意味が判らず、まし

てや一向に楽に成らなかった。助けを求め僧侶に縋り付こうとしたが杉本の体は僧

侶をすり抜けてしまった。

「何だ！この坊主は。坊主の仕事は仏を供養する事じゃないのか。魂を成仏させるのが坊主だろうが。俺は、俺は、何も悪い事はしていない。偉い仏教学者の言う通りに勇氣有る決断をしたんだ。早く成仏させてくれ。楽にしてくれ。お願いだから。頼むから。何だこの糞坊主」

杉本は何度も叫び続けた。しかし、僧侶は何も感じないのか、読経が終わると、参列者に向かって一言言った。

「ご子息は魂となってあの世に戻り、仏弟子となりました。これから御仏の下で修行に励まれます」

そして、お布施を受け取りそそくさと帰ってしまった。

あの世が有るのか。あの世から誰も迎えに来てくれない。どの様に行けば良いのかも分からない。頭が割れるように痛い。息が苦しい。孤独感と寂しさに苛まれ続けていた。杉本はこんな筈ではなかったと後悔した。楽な死に方を選んだ筈であった。そして、死ねば楽になれると思っていた。しかし、生きている時より、肉体の無い体が重くなり、苦しみが増し、それに強烈な痛みが加わった。杉本は両親の前に行き泣きながら必死に助けを求めたが気が付く事はなかった。更に、

ご本尊とご先祖

に助けを求めようと仏壇の前に行こうとしたが、何らかの力が働いているようで近

付く事も出来なかった。今、武田美代子、寺池健作、三澤直子も俺と同じ苦しみを

何処かで味わっているのか。こんな筈じゃなかった。杉本は後悔の念で一杯になった。

「仏教は自殺を禁じていない。自殺は悪ではない。勇気ある決断である」、筈であった。それなのになぜなんだ、杉本は思った。絶望感で一杯になった。

「あ．．．、助けてくれ、助けてくれ。お願いだから俺を助けてくれ」

杉本は叫び続けた。

十三、

杉本の両親は最愛の息子を自殺で亡くした悲しみで憔悴し、実家は重苦しい雰囲気

気に包まれていた。両親は杉本の幼い頃からのアルバムを取り出して、何度も何度も見ては涙を流した。生まれた頃の写真、小学校の時の写真、中学校、高校、大学、社会人と順番に見ながら、当時の事を思い出し、話しては再び泣いた。

「お父さん。これあの子が一才の時のお誕生日の写真よ」

「そうだね。まだヨチヨチ歩きで。可愛い盛りだったよな。俺もまだ若かったしな」

「お父さん。見て、見て。これは中学校の遠足の時の写真ですよ」

「反抗期で生意気盛りだったよな。ニキビが出始めた頃だよ」

「そうね……。ええと、これは社会人に成り立ての頃ね」

「就職が決まり、義男も自立出来るようになって、これでやっと親の責任が果たせたと思っただよな」

「あの子、近い将来結婚して孫の顔を見せてくれるかと楽しみにしていたのにねえ……」

そして再び涙するのであった。

「義男には余程辛い事が有ったんだろうな」

父は眼を真つ赤にしていた。

「何が有ったのでしょうかね、お父さん。私達に相談してくれても良かったのに」

「社会に出て生きていく事は確かに大変な事だけど、私達夫婦も今まで生き抜いてきたんだから義男にも生きていて貰いたかった。私達夫婦は結婚し子供を育てなが

ら今までなんとかやってきた。辛い事、苦しい事も有った。母さん、そうたる。人

間生きていれば死にたいと思う事は何度も有るよな。でも辛い事、苦しい事ばかり

じゃないよ。生きていれば必ず良い事もある。義男はまだ若い。これから先、生きていれば楽しい事も有った筈だよ。人生諦めるのが早すぎたよ。残念でならないね」

「お父さん。私達の育て方が悪かったのでしょうかね。甘やかせてしまったのでしょうか。もっと社会の荒波に耐えられる子に育てるべきだったのでしょうか」

「それはどうかな。元々、義男は内に籠もる性格だったから、自分

で考え込んで外

に発散する事が出来なかったのかも知れないな。私達に相談が出来なければ、誰か

友達にでも相談していてくれれば違った結果になっていたかも知れないな。私達夫

「婦は何の為に今まで頑張ってきたのかね」

「そうねえ……」

子を失くした親の悲痛な叫びであつた。

「母さん。でも今の世の中、昔と違って生きるのが難しい時代なのは確かかも知れ

ないね。若者に限らず全ての世代にとって。確実に自殺が増えていく。今まで社会を支えてきた五十代、六十代の人達の自殺も増えていくらしいよ」

「最近はJRや地下鉄もよく飛び込みが有って遅れる事が度々ですよ。ね。 ニュース

で聞きたびに今日もまた、今日もまたと思いますよ。出勤時間帯に多いみたいです

ね。会社に行きたくない理由があるのでしょうけど、そこまですな

くてもとは思う

のですが。私達、家庭の主婦には分からない何かがあるのでしょうか

けどねえ」

「そうだな、昔と違ってあまりにも世の中進歩が早すぎる。そのスピードに人間が

付いて行けない環境になっているのは確かだよ。あまりに技術開発、商品開発が早

く、それに携わる人間は昼夜を問わず働かせられる。それではないと企業として生き残れないシステムになってしまっているからな。人間の生活サイクル以上に世の中の進歩のサイクルが早くなり過ぎているんだな。人間の生活を豊かで楽にするのが技術進歩だったはずだが、逆にその進歩が人間社会を狂わせてしまっている。義男もその犠牲者の一人かも知れないな。でも矢張り自殺は良くないよ。母さん」

「そうですよ。世の中、辛くても苦しくても頑張って生きている人達が大勢いるんですから。残された者の悲しみは並大抵のものではないですからね」母が先立った息子を思い再び泣いた。

「今の社会全体が人に対しての優しさが無くなって来ているようだね。昔は貧しくても人間関係は大らかで余裕のようなものが有ったよな。近所付き合いいや子供同士にしてもそうだ。今は全てにおいて刺刺してきているし、人間が使い捨てにされる世の中だよ。他人がどうなるうとお構いなし、自分達の事だけしか考えなくなってしまうっている」

「社会が進歩する事で何処かが狂ってしまったんですね。親が子を殺す、子が親を殺す事件も増えてますから。嘆かわしい事です。私達からすると考

えられませんね」

「でも、でも・・・、義男には生きてもらいたかった。何が有ろうと生き続けていてもらいたかった。義男、義男、義男・・・」

父は息子の事を思い鳴咽してしまった。

十四、

杉本はいかに両親が息子を愛してくれていたか今になって分かった。毎日傍で両親の悲しむそんな姿を見るのが辛かった。

「親父、お袋。俺が悪かった。間違っていた。許してくれ。許してくれ」

杉本は悲しむ両親に向かって詫びたが、届く術もない。でも今は俺の死を悲しむより、この苦しい状態から早く助け出して欲しかったが、両親にはどうする事も出来なかった。すぐ傍に息子が居て助けを求めている事すら分からないのである。幾ら、杉本が傍で意思表示をしても気付く事はなかった。肩が凝るか、体が重いくらいにしか感じていないようであった。

「義男の魂はまだ私達の傍に居るのですかね。そうだとしたら、何か言って欲しいですね」

母親がそう言うと、杉本が叫んだ。

「そうだよ、母さん。俺は母さん、父さんの傍に居るよ。苦しんでいるんだ。お願いだから助けてよ」

しかし、母親の耳には届かなかった。

「でも私達の悲しみをよそに今頃義男の魂は仏様とご先祖様に導かれて成仏しあの世で気楽に過ごしているかもしれないな。母さん」

「父さん。そんなじゃないよ。成仏なんかしてないよ。成仏させてくれよ。仏様とご先祖様をお願いしてくれよ。頼むよ」

杉本は必死に叫んだ。

「そう思いたいですね。でも昔から自殺した人は中々成仏出来ない」と聞いてますけど。あの世に入れてもらえないとか」

「そうなんだよ。母さん。助けてくれよ」

杉本は悲痛な思いで再び叫んだ。

「色々言う人もいるだろうけど、あの世に行って確かめた訳でもないからな。私達の眼の黒い内は盛大供養を続ければ良いよ。義男もきつと成仏して喜んでくれるよ」

「そうですね。お父さん。仏壇で毎日ご先祖様をお願いしますね」

「私も毎日仏壇の前で手を合わせてお願いするでしょう」

杉本の叫びは両親に届く事はなかった。

十五、

一年も経ったであろうか、心労からか父親が心臓発作で急に亡くなった。臨終と

同時に、父親の魂は体から離れ穏やかな表情で暫くの間母親の傍に付いていた。四

十九日が過ぎた頃にはあの世から迎えが来て父親の魂は旅立って行った。

「父さん。父さんも死んだのだから俺が見えるだろう。俺を助けてくれよ。今の苦

しみから救い出してくれよ。そして一緒にあの世に連れて行ってくれよ。父さん。

父さんたら」

父親が亡くなった日から魂があのに旅立つ日まで杉本は父親の魂に何度も話し掛け

け助けを求めた。しかし、父親は杉本が助けを求めても一向に気が付かないでいた。

杉本には父親の魂が見えても父親には杉本が見えていなかった。頭が絶えず割れる

ように痛い。それも激痛であつた。苦しい、辛い。早くこの状態から助け出して欲

しい。しかし、誰も手を差し伸べてはくれない。このままの状態が未来永劫続くの

かと思うと、いたたまれなくなった。悲しかった。毎日を激痛に耐え、苦しみに耐

え、孤独感にさいなまれ、肉体を持った時以上に重くなった魂を引きずりこの世を

さ迷い続けるのであった。この苦しみから逃れるには、神仏の力に縋るしかない

思った。杉本はまず実家近くに在る寺に向かった。重い魂を引きずり苦しみに喘ぎ

ながら歩いた。やっとの思いで山門の前までたどり着き、山門を潜ろうとしたが、

それ以上進む事が出来ない。寺の境内に入る事が出来ないのである。何らかの見え

ない強い力により拒まれているかのようにであった。杉本は諦めずに別の寺を目指し

た。次の寺、また次の寺。どれだけ多くの寺を回ったであろうか。

結果は最初の寺

と同じであった。山門から境内には入る事が出来なかった。入る事が許されなかつ

たのである。自ら命を絶った者への仏の世界の仕打ちかと思った。

「仏は慈悲の世界。助けを求めれば、誰彼となく分け隔てなく助ける手を差し伸べ

てくれるのではなかったのか」

杉本は山門の前で呆然として立ち竦んだ。それでも杉本は山門の外から見えない本

堂の中の仏に向かって助けを求め祈り続けた。しかし、何ら応えは還ってこなかつ

た。寺の山門の前には杉本と同様に仏の慈悲に縋り助けを求め集まる自ら命を絶つ

た者達の惨めな姿を見た。山門の前に立ち竦む者、土下座をしている者、這い蹲っ

ている者、様々であった。しかし、仏は沈黙し、彼らには何ら手を差し伸べる事は

無かった。仕方なくその場を痛々しく立ち去り次の寺を目指す者。
疲れ果て山門の
前に座り込む者。ただ聞こえるのは彼らの呻きにも似た声だけであ
った。

「本当に仏は居るのか、仏と言う存在が有るのか」

杉本は疑問に思った。

「誠に仏が居るのなら、何故俺を助けくれない。何故成仏させてく
れない。仏は無
慈悲なのか。寺の僧侶や学者の言う事は嘘なのか。出鱈目を説いて
いるのか」

杉本は見えない仏に対して叫んだ。

十六、

杉本は再び重い魂を引きずり歩き始めた。仏が駄目なら神が有る。そう思い神社

を探しながら歩いた。神社の近くまで行き鳥居が見えたかと思うとその瞬間眩しい

光が放たれ眼が眩み、それ以上近付く事が出来なかった。他の神社にも行ったが同

じであつた。神社に近くなるに連れて杉本の体の無い魂は益々重くなり苦しさが増

幅した。キリスト教の教会にも行ったが、結果は神社と同じであつた。近寄る事す

ら出来ない。これも仏の世界と同じく神の世界からの仕打ちかと思つた。寺でも、

神社でも、教会でも、目に見えぬ壁が立ちはだかり全てが拒まれた。自ら命を絶つ

た者は神、仏の世界から見捨てられ完全に拒絶されていると感じた。

さ迷い歩くに従い自分と同じ境遇の者達とも出くわし、数が多いのに驚かされた。

彼らの姿も自分と同じく悲惨であつた。青白く透き通り、顔はこけ亡者の姿と化し、

叶わぬ助けを求めながらさ迷い続けていた。

決まって彼らの集まる処は廃屋か薄汚い暗い場所であつた。杉本も年月が経るに従

い彼らと同じくその様な場所で過ごすようになっていた。首吊り自殺をした者、焼

身自殺をした者、ビルの屋上から飛び降り自殺をした者、列車に飛

び込んだ者、入
水した者、様々であつた。彼らはその時の姿、痛み、苦しみを引き
ずりながらさ迷
つていた。足や腕が切断された者、頭が割れた者、顔が削げた者、
全身が焼け爛れ
た者、首が絞まつたままの者。激痛に耐えかね絶えず悲鳴を上げ苦
しみもがいて過
ごしていた。正に地獄絵を見ているようであつた。杉本は彼らの中
に高校生の渡辺
博光の姿を見たような気がした。首を吊つたようで、首には太い口
ーブが捲きつい
ていた。首が伸び、舌が口からはみ出し、ヨダレが絶えず滴り落ち
苦しみに喘いで
いた。彼らの中には心中した者達もいた。心中した者達はその瞬間
から未来永劫離
され二度と会う事は叶わなかった。

十七、

自ら命を絶った者達は同じ廃屋に居てもお互いに会話を交わす事はなかった。眼

を合わす事すらない。同じ境遇の者として、同じ場所に居るだけの事であった。働

く必要もなく、食べる必要もない。しかし、喉は渇き、激痛に呻き、苦しみにさい

なまれ、神、仏から見放された魂は行く当ても無くただたださ迷い、たむろするだ

けであった。幽霊屋敷と呼ばれ、肝試しに来る連中もいた。また心靈現象と称して

霊能者と取材に来る放送局も有った。廃屋が壊され更地になり、新たな建物が建つ

事になると更なる廃屋を求めて放浪するのである。今居る世界は地獄でもない。地

獄ならば神や仏の救いも有る筈。しかし、今居る世界は全てから見放された世界で

あった。自ら命を絶つ事が罪であるなら、その罪を犯した者達の牢獄の世界である。

今、味わっている痛み、苦しみなどは人間として生きていた時とは比べ物にならない

位に過酷で残忍である。生きている時の苦しみは一時的なもの。我慢も出来るで

ある。時が経てばその苦しみも無くなるであらう。自らも努力すれば苦しみから

抜け出す事も可能であらう。生きていれば時が全てを解決してくれる。親、兄弟、

親戚、友人の助けを借りる事も出来るかも知れない。たとえ辛く苦

しい人生でも、

時が来れば必ず魂は体から離れ元の世界に戻る。寿命を全うした魂は元の世界か

ら受け入れてももらえる。そこには今の様な過酷で苦しい世界は無い筈である。し

かし、今居る世界は誰も助けしてくれない。助かりたい、助けてもらいた。神の姿も

仏の姿も見えない。見えるのは同じ境遇のさ迷う亡者達だけである。気が狂えば楽

になるであろうが、それさえも許されない。死ぬ事も生きる事も出来ない世界。絶

えず拷問を受けているかのような状態である。自ら命を絶った者達への神、仏から

の仕打ち、戒めか・・・。

人間の世界でも中には亡者の姿が見える者達も居た。助けを求めて縋って行くと、

強い力で跳ね返された。生きている身内が彼らに供養を頼み救われる亡者の中には

いたが、それは稀であつた。

十八、

何年経ったであろうか。杉本は実家に行ってみた。母も既に亡くなっていた。代

が替わり弟夫婦が住んでいた。両親の遺影とその横には杉本の遺影も有った。幽か

に弟夫婦の会話が聞こえた。

「義次さん。お母様、今年は三回忌よね。お父様はいつ亡くなられたのでした？」

「そうだな。親父が死んで七年になるかな。仏壇に過去帳が有るから調べてみるよ」

弟の嫁が仏壇から過去帳を取り出してきた。

「お父様が亡くなられて七年だね。やはり七回忌よ。お父さんの七回忌とお母さんの三回忌を一緒にお寺さんにして頂きましょうよ」

「輝美。それが良いな」

「あれえ。お兄さん、去年が七回忌だったんだわ。いけない、すっかり忘れていた」

「兄貴か……。もうそんなになるのか」

「お兄さん、確か自殺されたとか」

「うん。そうなんだよな。兄貴は馬鹿だよ。親不孝もいいところだよ。結局両親の寿

命を縮めたのは兄貴だよな。罪な事するよ」

「お父さんやお母さんは、お兄さんが自殺されたのが余程辛かったのでしょうね」

「毎日、毎日悲しんでばかりいたよ。親父なんか憔悴しきってさ、傍で見ていて可

哀相だったよ。手塩に掛けた子供に先立たれたのだからな。親父は俺なんかより兄

貴に期待していたもんなあ。母親も辛かったんだろうけど、親父の悲しみ方があま

りにもひどかったもので、母親はそれを見てぐっと耐えていたんだと思うよ。母親

が確りしなければと思ったんだろうな。気丈に振舞っていたよな。いざとなると女

の方が強いかもな。男は精神的に脆いからな」

「そうね。女には子供を生む力があるからね。母性本能と言つのか、男性よりは逆境に強いかもね」

そう言つて弟の嫁が笑っていた。

「俺は自分の子供が先に死ぬなんて考えられないよ。もしそうになったら気が狂うか

もしれないな。親父の気持が良く分かるよ」

「もしも、もしもよ、そんな事になったら私だってどうなるか分か

らないわよ」

「そうだよな。でもお袋は本当、気丈だったよな」

「お父様の手前、随分と我慢されていたのでしょうね。子供は夫婦の宝だし。それに、私達夫婦にはそんな事絶対にならないわよ。上の子も、今お腹の中に居る子も大丈夫よ」

「子供が居てこそ親はいくら辛くても、苦しくても頑張る事が出来るんだよな。それに子供が順調に育ってくれる事が親の最大の喜びなんだよな」

「そうね。親は有り難いはね。子供の為には犠牲になれるんだもの。子供を守る為には死んでも良いと思うもね」

「俺も子を持つ親となって初めて親の有り難味が分かったよ」

「私もそうよ」

「そうだ、そうだ。俺たちの子供は絶対に大丈夫だ。俺が絶対に守ってみせるよ」

「私も精一杯頑張るわよ」

弟夫婦はとても幸せそうだった。

弟の代になり、更に弟の子供の代になるにつれて自分の存在も忘れ

去られてしまう

のであるうと思うと尚更切なく、悲しくなり、居たたまれない気持ちになった。忘れ

去られる前に助けてもらいたい。肉体から離れても苦痛に苛まれ続けてこの魂

を早く救ってもらいたい。そして行くべき世界に送り届けて貰いたい。杉本は願ひ続けた。

十九、

神、仏に見放され、身内にも忘れさられようとしている。杉本は重い魂を引き摺りながら廃屋に戻って行った。その道すがら思い続けた。

「俺は愚かな事をしてしまった。もう取り返しがつかない。たとえ辛くても、苦しくても、人間として生きるべきだった。寿命を全うすべきだった。」

人間の寿命なんてたいした長さではない。精々六十年、長く生きたとしても七十年か八十年である。

たとえ百年生きたとしてもたいした長さではない。苦しい時、辛い時はその人生に於ける一瞬の出来事である。決して長くは続かない。生きていれば楽しい事も必ず

有る。生きていれば全ては時が解決してくれる。人間の気持は決して長くは続かない。絶えず変化する。苦しい事も辛い事も時が経てば忘れてしまう。忘れさせてく

れる。そのように人間は作られている。それ故、新たな喜びを求めて行動する事も出来る。生きていれば山も有り谷も有る。喜びも有れば苦しみも有る。それが人生

である。一時の苦しみに打ちひしがれ愚かな行動に走った故、未来永劫、苦痛から

抜け出せない世界に陥ってしまう。今の俺がそうだ。この世界では時間が止まって

しまっている。痛み、苦しみ、辛さ、孤独・・・、これらから決し

て解放たれる

事がない。永久に付き纏う苦しみである。時間が解決してくれない世界。許される

ものなら許してもらいたい。助けてもらいたい。救ってもらいたい。もう二度と過

ちは犯すことはしないから」

杉本は後悔を重ね、何度も叫んだ。廃屋が近づくに従い、多くの呻き声が聞こえて

きた。同じ過ちを犯した者達の悲痛の叫びであった。彼らも杉本と同様に助けを求

め願い続けている。廃屋の中に入ると、いつも見慣れてはいたが眼を背けるたくな

る光景であった。しかし、今の杉本の居場所はここしかない。日毎にこの廃屋に集

まってくる者達の数も増えている。生きる事に耐えられず、楽になれると信じ、自

らの命を絶つて来るのであろうが、期待とは全く逆の世界、生きる以上に苦しい世

界に入り込んでしまった彼らである。今の俺と同じく、永遠に抜け出す事が叶わな

い、愚かな魂の捨て場所である。

二十、

杉本は痛みに打ちひしがれボロボロになった重たい魂を廃屋の部屋の隅に横たえた。これからもこの状態が続くのか……。神が居るなら、仏が居るなら助けてもらいたい。いくら辛くても泣く事すら出来ない。眼を閉じる事も許されない、眠る事も許されない。

一瞬であつた。杉本の眼に光が走り何も見えなくなり深い眠りに陥つたように思えた。瞼を閉じてはいるが何処か明るい処に在るようで、温もりも感じた。自分の右手を誰かが握り締めている。とても優しい感触だつた。

「今までの苦痛が無くなっている。どうしたのか？」

眼を開けようとしたが、眩しくて開ける事が出来なかつた。暫くして周りの明るさに慣れ、恐る恐る眼を開けてみた。するとそこには既に亡くなつたはずの母の顔が見えた。

「母さん」

杉本の声は小さかつた。

「義男、義男。気が付いたんだね」

母が息子の右手を強く握り締めながら叫んだ。

「母さん。助けに来てくれたんだ」

杉本は母が自分をあの世から助けに来てくれたのだと思った。杉本の眼からは嬉しさのあまり、涙が止め処なく流れた。

「良かったよ。本当に良かった」

母も涙を流し喜んでいた。

「母さん。ここは何処？天国なの」

「何を言うのよ。ここは病院よ」

杉本は母の言葉を疑った。

「病院？俺、死んだんだろ」

「生きているはよ」

母は息子の顔を見て、優しく微笑んでいた。

杉本はまだ信じられなかった。しかし、時が経つにつれて、自分の置かれている情

況が徐々に分かってきた。左腕には点滴の針が刺され、鼻の穴には酸素吸入の管、

性器には尿採取の為の管が通されていた。

「俺、死んだんだよな」

杉本は確かめるように母に訊いた。

「義男。あなたは生きているわ」

「俺、死ななかったんだ」

「六ヶ月の間、昏睡状態だったの」

「昏睡状態？」

「一時は危なかったわ。どうなるかと思ったけど、気が付いて良かった。本当に良かった。義男が死んだらどうしようかと思って。この六ヶ月間、毎日が辛くて、辛くて」

母が再び泣いた。

それでは今迄俺が居た世界は夢の中だったのか、そう思うと死ななくて良かったと杉本は思った。

「お父さんも毎日仏壇に向かってご先祖様に何とか義男を助けてやってくれるようにとお願いしていたわ。氏神様にも毎日のように回復祈願のお百度を踏みに行っていたのよ」

「母さん。御免」

杉本は生きている喜びを感じ、それと共に両親に心配を掛けた事への申し訳ない気持で一杯になった。そして、助かて良かったと本当に心から思った。

「親父は？」

「直ぐに連絡するから。喜んで飛んでくるはよ」

間もなくして父親が病室に到着した。父親は杉本の顔を見るなり嬉しさのあまり顔全体を涙でぬらし言葉が出てこなかった。

「父さん。御免よ」

杉本は力の無い小さな声で詫びた。

「母さん。俺、どうしてこの病院に居るんだ。他の連中は？」

「他の人達も助かったわよ」

「そうなんだ」

杉本は皆も助かって良かったと思った。

「武田さんて女の方。あの方だけが睡眠薬を飲んでいなかったらしくて眼が覚めた
ら怖くなったので直ぐに救急車を呼んだそうよ」

杉本は武田美代子に心の中で感謝した。

「義男。お願いだからこれからも生きてくれよ。親より早くしぬな」
普段無口な父親からの精一杯の言葉であった。

「父さん、母さん。御免よ。俺、これからは頑張って生きるよ。二度と死ぬなんて考えないよ」

杉本は涙ながらに両親に詫びた。

両親は杉本の言葉を聞いて安心し、そして息子が生きている事の喜びを感じ再び涙した。それからは体力も徐々に回復に向かい、一週間程して杉本は車椅子に載せられ、病院の隣に面した公園に連れて行ってもらった。

既に八月の初めであった。日差しは強く、眩しかった。公園の木々からは蝉の鳴き声が聞こえた。杉本にとっては久し振りに浴びる陽の光である。体から汗が滲み出てきた。木陰に入ると涼しく気持ちが良かった。生きている事を体全体で感じ取り、生きていて良かったと思った。

「六ヶ月か・・・」

杉本には何年にも何十年にも思えた。あれが夢で本当に良かったと

心の底から思っ

た。あのような世界が有るのか無いのか定かではない。夢の中だけの世界かも知れない。それとも両親の強い思いが神仏に通じ死の淵から助け出されたのかもしれない。たとえ夢だったにしてもあの様な世界は二度と御免である。人はそれぞれである。生きる事も死ぬ事も個人の自由である。しかし、杉本自身、これからは何が有ろうとも生きる道を選ぶ事にした。

公園の片隅の花壇に目をやると、向日葵と木槿が綺麗な花を咲かせているのが良く見えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2454f/>

自死への誘い

2011年6月1日16時16分発行